

「世界人権宣言」が国連総会で異議なく採択されたのは1948年12月10日であった。英語ではWORLDではなくUNIVERSAL（普遍的な）が使われている。

1993年6月にウィーンで開かれた世界人権会議で、この宣言が集中的に議論されたという。アメリカのクリントン政権を代表したのはウォーレン・クリストファー国務長官であった。

『チョムスキー、民意と人権を語る』（集英社新書・2005年）によると、クリストファーはこう語ったという。「人権を最も甚だしく侵害して居るのは世界の侵略者であり、兵器の拡散を奨励している者たちである。」「人権の普遍性に対する態度として世界中に受け入れられる基準は一つしかなく、アメリカ政府はその基準をすべての国に適用する」と強調した。「アメリカは世界人権宣言を弱体化させる勢力に決して与せず：非西欧文化圏では人権について異なる解釈をすべきだと考える人びとに反対する」。(100-101ページ)

真実を隠蔽する偽善者の傲岸には唾然となる。世界一の武器商人はアメリカ政府支援の軍需資本ではないか。その兵器の売上高の半分以上は第三世界向けなのだし、しかもその大半は、残酷な独裁政権なのだ。

この武器商人の仲間である英仏はインドネシアとルワンダの大量殺戮に武器を提供した。

アメリカはニカラグアに対するテロ戦争で「武力行使した」として国際司法裁判所に訴えられ、すべての国に対して国際法遵守を要求する国連安保理事会の決議に傲慢にも拒否権を行使し、国連総会に繰り返し提出される同様の嘆願をも拒絶し続けている国（102ページ）なのに、普遍的な人権の守り手とよくも自称できるものだ。

エドワード・W・サイードの『イスラム報道』（みすず書房・1996・2001）の記述を拾う。「ヨーロッパにおける中世の大半およびルネサンス初期には、イスラムは背信と冒涇と曖昧の悪魔的信仰であると信じられた。ムスリムがムハンマドを預言者とみなし、神とは考えないのは重大とは思えなかった。キリスト教徒にとって問題なのは、ムハンマドが偽りの預言者、不和の煽動者、官能論者、偽善者、悪魔の化身であることだった。」「ムスリムは石油の供給者やテ

ロリスト、ごく最近では血に飢えた暴徒として風刺漫画にしばしば登場するのである。…イスラム世界に向けられた度重なる人種差別や侵略…」。

片言隻句をつまみ食いしてはサイードに失礼千万なのだが、彼の見識から学んで考えると、西欧世界、キリスト教文化社会が創り上げたムハンマドやムスリムのマイナス・イメージが、パリの週刊紙『シャルリー・エブド』側に濃厚に息づいていたのだろう。つまり、イスラム世界の一切を劣等視し侮蔑し、とどのつまり地上から抹殺したいというレイシストでイスラム嫌いの情念を燃やしているのだろう。

この迷妄の執念は、資本主義的植民地的な白人優越主義の体制のもとで培養された価値観・倫理観に由来するのだろう。非欧米人の観念や文化に対する敬意を傲慢不遜にも欠落させていても、それが非欧米人の人間としての尊厳を毀損する事に他ならないと気付きもしない。

「日曜日に街頭に繰り出した何百万の人びとは、シヤルリー・エブドで射殺された犠牲者を悼みテロリズムに抗議するという連帯を示した。ヨーロッパの政治指導者やイスラエル首相もその隊列に加わった。理性と良心が示された。

が、同じ日、ムスリムの別なグループ「ボコ・ハラム」がナイジェリア人を推定2000人殺害という報道があつて、表向きはテロリズムに反対し生命の尊厳を支持する集会で、ナイジェリアのいち拾いした人びとへの連帯の表明があつてしかるべきだったのだが、事実は、西側報道界が注目したのに、大量殺戮はなかったみたい扱われた。」首都ワシントンにある政策研究所の客員研究所員アジャム・バラカ氏が「パリで白人優越主義を誇示、西欧的偽善の祝典」と題してCommon Dreams に書いたことだ。

彼はアメリカ黒人作家ジェームズ・ボールドウィンの言葉を冒頭に引用している。「文明化した」子どもが哀れにも惨めな子どもを創り出した。冷酷に用意周到に、そして、現状を変えるつもりはない。悲惨な人びとの殺戮と奴隷化の責任は彼らにある。自分たちの死活的に重要な利害が脅威にさらされると観るや、いつでもどこでも無防備な子どもたちに爆弾の雨を降らせるし、拷問で死に至らしめることなど平気だし、人の生命の「尊厳」とか文明世界の良心とかを語っても、この人たちのことは思慮の外にあるのだ」。